

つて。魚釣りをしているおじさんには「つれますか」、行き会う人には「きれいな夕日ですね」。日本人なら夕焼にカラスを思ふかも知れない。だが沢山いるカラスは何故か飛ばない。田畑で労を終えた人々は三人、五人と列をつくり、声高らかに民謡を口ずさみながら帰りを急ぐ。夕闇がせまり黒が他を被う頃、がぜん生命が生き返つたように活気を取り戻すのである。ブンニマ（満月）の夜はことさらである。村々に響くムリダンガの音は夜の更るの知らない。やさしい月光が人々に生の喜びと平安を与えるようである。人間が月へ行くようになって。進んだ文化はこの生活を原始的だと片付けるかも知れない。では、自然とは何なのか？、人間は自然の中の何なの？改めて考えること多いのではなからうか。

（たなかてんげん・文学部講師）

流水不腐

―舞台のうえの紅小兵―

藤堂 恭俊

中国を訪れた六日目の夜、つまり石壁玄中寺に曇鸞・道綽・善導三祖師の遺跡を偲び、さらに人民の憩いの場として賑あっている晋祠に、聖母や三十有余の侍女たちの塑像、貞観二十年の唐太宗御書の碑、金代の大吊鐘、渾渾とわき出る水

源などを見学し、宿舎でのレセプションがすんだあと、すぐ近くの劇場（五百人ぐらい収容できそうな簡素な建物、客席は五人がけ木製の椅子）で、山西紡績機械廠職工子弟学校の紅小兵たちの踊りや歌を見せて頂くことになった。茅台酒をはじめ立新鮮啤酒や長白山葡萄酒で、消毒もすっかり行きとどいたあととあって、酔気のいたすところ、こつくり・こつくりとやらないだらうか、と懸念しながら劇場に入ると、私たちの足並にあわせた割るような拍子に迎えられる。薄ぐらい場内には、既に兵隊さんが客席の大半を占め、開幕おそしと待ちわびている様子が伺われた。

開幕のベルとともに、小学校の二、三年生であろうか、可愛い女の児が舞台の袖にあらわれ、司会の労をとる。なかなか堂に入ったもので、高く澄みきった声、その仕草たるやこましくれて愛くるしい。紅小兵たちが日頃、少年宮で課外活動として鍛えあげた成果を踊りに、歌に、劇に披露してくれるので、なかなか「楽睡眠」どころではない。中国語を解せぬ私なれど、「森のなかの運動会」だけはよくわかり、興味をさそわれた。それもそのはず、懐しい「うさぎ」とかめ」の童話劇であったが、ただその幕切れ寸前は他を侮り、みずから怠った兎は、他の動物たちの批判よろしきを受けて自己批判し、ついに森のなかの動物たちが団結して平和な森を実現するという、いかにも新中国にふさわしく仕立てあげられていた。

私たち一行は公演がおわったあと、案内されるまま舞台に

あがつて紅小兵たちの間に入り、日中の老・少年が異口同音に「おてて つないで」を合唱して大喝采を浴びる。微笑をたたえながら私に握手を求めてきた紅小兵に、腰をおとしながら持参した鑑真和尚肖像のパッジを、舞台着の胸のあたりにつけ、高く抱きあげれば、全身にあふれる喜びを瞳にかがやかしていた。喝采の嵐は退場するまで続き、日中友好の絆を結んだことであつた。

「流れる水は腐らず、扉の心棒は虫がくわない」とは、『毛主席語録』のなかに、批判について述べるところに譬喩として記されている文章である。「われわれには、批判と自己批判というマルクスレーニン主義の武器がある」と語りかける毛主席は、「前のあやまりを、後のいましめとする」こと、

「病をなおして人を救う」ことが批判であると言う。さらに「清潔をたもつために、ほこりを落とすために、毎日顔を洗い、毎日掃除しなければならないのと同じように、自己満足をおさえ、常に自分の欠点を批判すべきである」と、自己批判について語っている。いうまでもなくかの童話劇は、この精神・実践を示すものである。ともかく、中国人民は毎日鏡の前に向っているような、きびしい生活を続けている、とさえ思われ、まさに所在道場の感を深くさせられた。

開幕にあたつて頂いたB6型ぐらいいの一枚刷のプログラムには、上演される題名だけが印刷されていて、舞台装置や振付にかかわる人は勿論、作者や作曲者、演出者の名前すら載

せられていなかった。このことはただ単なる省略とみなすべきか、態となされていると見るべきか、首をかしげざるを得なかつた。私はこの意図するところを『語録』のなかに見出せるように思った。それは紛れもなく売名や私利私欲をいやしむ心、いな「克己奉仕」、「為人民服務」という人民のために、誠心誠意奉仕する心のあらわれである。そこには誇示すべき私はなく、おしみなく奉仕を原稿紙の上に、五線紙の上に、舞台の上にくりひろげるばかりなのである。ともかく「名利をはなれる」と言い、「精進にして怠ることなかれ」とは、もはや仏家の専売特許でなくなっている。私たちはこのほか、西安・南京・上海で、このような公演に招かれたが、政治と文芸とが統一されていることを、まざまざと見せつけられた。

私たち一行は三日後、特別仕立ての飛行機で西安をあとに、中国革命のメッカである延安に入った。宝塔山上にそびえる九重の塔を背にしなが、一路延河を遡つて楊家嶺に毛主席の旧居を訪れた。まず毛主席が「愚公山を移す」を発表した中央大礼堂を見学して、さらにうしろの建物の一室に入ったとき、一九四二年五月に毛主席が文芸座談会を行ったのはここですと知らされた。

「人民が一心同体となつて敵と戦うのを助けるため、人民を結集し、人民を教育し、敵に打撃をあたえ、敵を消滅する有力な武器として、文学・芸術を適切に革命という機械全体の中の一構成部分たらしめるのである」

とは、この座談会での主席のことばである。各地の公演で感じとった政治と文芸の統一はまさに「革命的な政治的内容と、可能なかぎり完全な芸術的な形式との統一」を示すものであり、延安における文芸座談会の内容の具現にはかならない。西安文芸工作隊の公演に招かれたとき、舞台上に「紀念毛主席（在延安文芸座談会上的講話）發表三十四周年大会」という横幕が張られていたのは、諾なるかなである。（「中国見たまま、感じたまま」の一節）

（とうとうきようしゅん・文学部教授）

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。